慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	犠牲の研究
Sub Title	
Author	河上, 肇
Publisher	三田学会
Publication year	1912
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.6, No.2 (1912. 4) ,p.192(4)- 207(19)
JaLC DOI	10.14991/001.19120400-0004
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19120400-0004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

犧牲の研究

河上肇

一

吾等の物に對する關係は種々あるが中に於いて、經濟上最も重要なるものゝ一は物の享樂(享樂的消費及び使用)と云ふこと也。故に余は先づ此の場合に於ける犧牲及び差益の問題を考へ見んと欲す。

吾等は物の消費及び使用に依つて一定の享樂を感ずることあり。而して此事たる、一考したる所にては極めて簡單なる一の事柄なれども、再考する時は稍々複雜なる事情の合成果たるを知るに至る。

例へば吾等は煙草を喫して一定の快樂を感ずと云ふが、其の快樂と云ふ中には、煙が舌の神經を刺戟するが爲めに生ずる快感あり、鼻の神經を刺戟するが爲めに生ずる快感あり、咽喉の神經を刺戟するが爲めに生ずる快感あり、將た眼の神經を刺戟するが爲めに生ずる快感もあり。されば食事の後殊に酒の後又は珈琲の後

等、舌の神經が特別の狀態を呈し居る時は、吾等は喫煙に依りて特別の快感を覺ゆることあり。又た風邪の爲め鼻加答兒又は咽喉加答兒を起し是等局部の神經に異狀を生じ居る場合には、喫煙に依り却て不快を感ずることもあり。又た夜間暗所に於いて喫煙するに、快感を覺ゆることと比較的に少きは煙の眼に見へざるが爲めにて、即ち喫煙の快樂の一部は眼の働きに待つてとあるの證據なり。

此の如く喫煙に依つて吾等の享くる所の快樂は、或は舌より來り、或は鼻より來り、或は咽喉より來り、或は眼より來るものにて、單に此點より云ふも其の現象は頗る複雜なり。然るに場合に依りては、吾等は是等感官の或者よりしては快樂の感覺を受取り、他の或者よりしては不快の感覺を受取ることあり。例へば喫煙は舌にも鼻にも心地快けれども、其煙眼に入る時は強いて涙を絞り、吾等は其點に於いて若干の苦痛を感ずることあり。されば斯かる場合に吾等が喫煙に依りて一定の快樂を意識すと云ふは、生ずる所の總快樂の中より一定の苦痛を差引きしたる剩餘の純快樂を意識するに外ならざる也。而して此の如きは單に之を舌のみに就いて云ふも同じ事にて、即ち煙の刺戟は快けれども脂の味は苦しと云ふが如く

に快感と苦感とが同じ局部に同時に起り、其の差引の結果として或は快樂を意識し或は苦痛を意識するに至ると云ふことも有り得る也。否、なほ更に進んで云へば、同じ舌の同じ局部に對する同じ煙の同じ刺戟よりして、快感を生ずべき作用と苦感を生ずべき作用とが同時に併び生じ、其の積極消極兩作用の結果として始めて吾人の意識の上に一定の快感を生ずる場合もあり得る也。

思ふに吾人の肉體が外物より受くる刺戟の中には、吾人の生活力を高め其の「エネルギー」を增すものと、吾人の生活力を弱め其の「エネルギー」を減ずるものとの二種ありて、前者は吾人に快感を覺えしむるの原因と爲り、後者は吾人に苦痛を覺えしむるの原因と爲り、而して一定の時一定の刺戟に依つて生ずる變化の中、前者後者に優らば、其の優れるだけの差額のものが始めて吾人の意識の上に一定の快樂と爲りて見はれ、之に反し後者前者に勝たば、其の勝てるだけの差額のものが等しく又た吾人の意識の上に一定の苦痛と爲りて見はるゝものと見て差支なからん。

事聊か餘談なれども序なれば一言し置かんに、かの享樂遞減の法則なるもの（余は之を明白に效用遞減の法則と區別せんとするもの、仔細は今茲に說き難し）は、此

點より考ふるに、畢竟は享樂遞減（又は遞增）の法則と苦痛遞增（又は遞減）の法則との兩者の作用の合成果に外ならざるべし。

例へば吾人が引續き酒を飲む場合に、一杯又た一杯、盃を重ぬるに從つて、其味次第に減じて遂には零と爲り、更に其れ以上を飲まば却て苦痛を感ずるに至るが如きは、元と酒の飲用に依りて生ずる作用が最初の中は快樂のみより成り立ち、或る程度に至つて其が俄に變じて苦痛と爲ると云ふ次第には非ずして、恐らくは最初よりして、快樂を生ずべき作用と共に苦痛を生ずべき作用も同時に併び生じ居ると雖も、只だ最初の中は、前者の度合後者に比して大なるが爲めに意識の上には只だ快樂のみ感ぜられ、而して其後は、前者の度合次第に減じて後者の度合漸く增すに至るを以て、或點に至らば二者正に平均して、意識の上には一時快藥にもあらず苦痛にもあらずと云ふ中和の感を生ずと雖も、更に進んでは後者の度合次第に前者の度合に勝り、從て差引きしたるだけのものが吾人の意識の上に一定の苦痛と爲つて見はるゝ次第ならん。乃ち之を數字に表はさば、其の關係例へば次の如くなるべし。

消費せらるゝ貨物の單位	之に依りて生ずる快樂の原因	同上苦痛の原因	意識に上る快樂(＋)又は苦痛(－)	
第一	100	0	＋100	快樂の遞減
第二	90	10	＋ 80	
第三	80	20	＋ 60	
第四	70	30	＋ 40	
第五	60	40	＋ 20	
第六	50	50	0	
第七	40	60	－ 20	苦痛の遞增
第八	30	70	－ 40	
第九	20	80	－ 60	
第十	10	90	－ 80	
第十一	0	100	－100	

(註)以上 Jh. Ribot, The Psychology of the Emotion, pp. 56 et seq. に負ふ所多し

以上述ぶる所に依つて考ふれば、喫煙と云ふが如き簡單なる物の消費に當つても、吾人は種々なる器官の種々なる局部に種々なる刺戟を受くるもの也。而して是等の刺戟の中、快感を生ずべきものと苦痛を生ずべきものとが同時に同じ器官の同じ局部に併び生ずるならば、吾人は只だ二者の差額に就いて或は快感を覺え或は苦痛を覺ゆるに止ると雖も、若し是等の刺戟が種々なる器官の種々なる局部を時を異にして襲ふ時は、或る時は或る局部に於いて快感を覺え、或る他の局部に於いて苦痛を覺ゆる等のことあるもの也。(例へば喫煙の時に、舌には快感を覺ゆるも、眼には苦痛を感じ、又た暫くしては頭痛を感ずるに至ると云ふが如し)。されば吾人が、一定の貨物を消費せんと決意するが爲めには、先づ其物の消費に依りて生ずる有利の變化と不利の變化とを比較秤量して、縱ひ後者を忍ぶも前者を享くるを望まじと考ふるに至ることを要件とする也。

今も有利の變化を享けんが爲めに不利の變化を忍ぶと云ふは犧牲 Opfer なり、費用Kostenなり、而して此の犧牲又は費用を差引きて殘る所のものは剩餘 Überschuss なり收益 Ertrag なり。故に凡て吾人が物の消費の決意を爲すは、其物の消費それ自身が剩餘又は收益を生ずると認めらるゝ場合に限ると云ふべし。

多くの物の消費は、消費それ自身の中に以上述べたるが如き意味の犧牲を伴ふもの也。乍併、空氣の呼吸の如きは全く其の例外にして、吾人は之が爲め何等の犧牲を供することなし。故に空氣を呼吸すべきや否やは曾て吾人の意識に疑問と爲つて見はるゝことなし。

多くの物の消費は消費それ自身の中に一定の犧牲を伴ふものなれども、其の犧牲を出來得る限り最小にすることは、物の改良又は物の消費方法の改良に依りて、絶へず講せられつゝある所なり。例へば不快なる臭味を有する食物に改良を加へて是等の臭味を除き、所謂口に苦き良藥に改良を加へて是等の苦味を取去るが如し。

物それ自身の消費に伴ふ犧牲の提供は之を其の消費の代價Preisと見ることを得。されば此の意味に於いて空氣の如きは消費それ自身に代價を要することなしと雖も、他の殆ど凡ての貨物は消費それ自身に常に一定の代價を要するものと見ることを得。

既に物の消費それ自身が一定の代價を要する以上、吾人は凡て物の消費の決意を目して交換の決意と考ふることを得。而して交換は卽ち選擇なり。故に吾人が物の消費の決意は皆な選擇の結果に成ると見ることを得。只だ此の如き交換乃至選擇の問題を伴はざるは獨り空氣あるのみ。是れ空氣が所謂Bedürfnisskalaの上に何等の地位を占め得ざる所以なり。

二

以上述べたる所は物の消費に伴ふ第一の犧牲なり。然るに犧牲と看做すべきものは此外猶ほ種類多し。

蓋し物の消費は必ず一定の時間を必要とするものなるが、而かも人生は約五十年を定命とし、七十は古來稀なるが故に、一定の時間を費すと云ふことは吾人にとりて常に一定の犧牲たらざるを得ざる也。最も同じ時間に種々の物の消費を同時に併せ行ふことを得るならば、此の如き犧牲の問題を生せずと雖も多くの物の消費は同時に之を併せ行ふを得ざる也。例へば睡眠の樂を享受せんが爲めには吾人は讀書の時間を犧牲とせざるべからず、又た觀劇の樂を享受せんが爲めには睡眠の時間を犧牲とせざるべからず。或は又た等しく讀書し等しく觀劇する場

合にても、甲の書、甲の劇を觀るが爲めには、乙の書、乙の劇を觀ることを犧牲とせざるべからず。此の如く一定の物の消費は一定の時間を吸收し去るを普通とするが故に、吾人は常に其の限りある時間をば最も己の希望する方面に提供せんことを努むるもの也。

されば此點に於いて一定の物の消費の決意は更に第二段の選擇を必要とすることゝ爲る。例へば睡眠に依つて生ずる利益と不利とを比較して假りに利益多きことと五なりと認むとも、若し其人が同時に觀劇に依つて生ずる利益と不利とを比較して其の利益の剩餘十なりと認むるならば、睡眠も觀劇も共に彼にとりて一定の差益を與ふるものなれども、其の差益の程度彼と此と相違するが故に、彼は前者を棄てゝ後者を取ることに依りて更に若干の差益を取得することを得る也。

或人が一定の時に一定の物の消費を爲すべく決意せるは、其の同じ時に同じ犧牲を以て爲すを得べかりし一切の物の消費を犧牲とすべく決意せる也。例へば觀劇を爲すべく決意したりとせば、之と同時に讀書も睡眠も散歩も訪問も其他種々の事柄をば凡て皆な犧牲とすべく決意せる也。

此の如く考ふれば、凡ての苦痛が人生に跡を絶ちたる場合にも、猶ほ常に犧牲の問題あり、收益の問題あり、代價の問題あり、選擇の問題あるなり。

然るに空氣の呼吸の如きは、睡眠しながら、讀書しながら、觀劇しながら、他の何物の消費をも犧牲とすることなくして之を行ふことを得。故に獨り空氣の呼吸のみは、第二段の意味に於ける一切の犧牲、代價、收益、選擇の問題を伴ふことなし。

三

次に物は之を將來の消費に供せんとする場合には、之を保持し置くの必要あり。然るに多くの物の保持は一定の勞費を必要とし、少くとも之が貯藏の爲めに一定の面積を必要とするもの也。故に此點よりして、多くの貨物の保持は又た一定の犧牲を伴ふもの也。

乍併、空氣は此點に於いても何等の犧牲を必要とすることなし。否な啻に空氣のみならず、土地の如く其れ自身に面積を有するもの又は貨幣の如く他人の悅んで之が保持を引受くるもの等にありては、之が保持の爲め等しく亦た何等の犧牲を要することなし。(最も土地の如きは其の廣さを有すと云ふ性質のみは不壞なれ

ども、所謂地味地形の如きは一定の勞費を投ずるに非ざれば之を維持すること難く、又た貨幣の如きも之が保管に代價を必要とする場合も是れなきには非ず。今ま茲に云ふ所は、凡て斯かる場合を除外せること言を待たず)。

空氣、土地、貨幣等の效用が特別の性質を有することは、本年二月發行の『國家學會雜誌』に於いて、效用遞減の法則を論せし際、吾人は既に其の一班を記述し置きしが故に、茲には略して詳論せず。

四

以上吾人は、物の消費それ自身に伴ふ犧牲、他物の消費の犧牲、之が保持の爲めの犧牲に就いて論じたり。然るに最後に最も重要なる犧牲として吾人は物の獲得の爲めに要する犧牲を擧ぐることを得。

抑々吾人の物に對する經濟上の關係は、消費、保持、獲得、拋棄の四者に分つことを得るもの也。茲に獲得と云ふは新たに其物を自己の支配に歸することなり。而して既に一定の物を自己の支配に歸したる後は、直に之を消費するか、又は將來の消費の爲めに之を保持するか、又は他物を獲得する爲め乃至は單に其物の保持の負擔を免るゝが爲めに之を拋棄するか、是等三樣の態度の何れかを執るもの也。

即ち吾人の物に對する態度は、之を取るか、之を使ふか、之を持つて居るか、之を放つかの四者何れかに歸する也　而して此の中物の消費及び保持の二者に就いては、前既に述べたるが故に、今ま第三段に進んで之が獲得の場合に於ける犧牲に就いて述べんとする也。

物の獲得の爲めに一定の犧牲を要することは、殆ど凡ての學者の說く所なり。乍併、吾人の見る所に依れば其の犧牲の內容を解剖すること、往々にして不充分なり。思ふに犧牲の研究の中、最も肝要なるは此の獲得の犧牲なるが故に――以上の各節に於いては只だ犧牲の必要なることを指摘したるに止まれども――本節に於いては少しく其の內容の解剖を試みんと欲す。

扨て此點に就き吾人の注意すべきことは、一定の物の獲得に要する犧牲は複雜なる成分より成るを常とすと云ふこと也。例へば余が或る店頭に立ちて饅頭を買はんとすと云ふ場合には、先づ其の代價として若干の貨幣を犧牲とせざるべからず。而して此事は凡ての學者の必ず犧牲として認むる所なれども、而かも此事

のみが唯一の犧牲にあらざることを注意する者は稀なり。然らば其他の犧牲は何ぞやと云ふに、余は自宅より店頭に足を運ばざるべからず、これ一種の勞力の犧牲なり。次に店の者と多少の談話を交へ、或は貨幣を支出し或は品物を受取らざるべからず。然るに此の如く他人と一定の交渉を惹起すと云ふことは、人に依りては甚だ面倒なる負擔なり、而して斯かる面倒を負擔することは亦た一種の犧牲と云はざるべからず。次に店頭に立ちて饅頭など買ひ求むるは稍々體裁惡しきことなれば、其の體裁惡しきを忍ぶと云ふことは又た多少の名譽の犧牲と云はざるべからず。之に依りて考ふれば余が饅頭を買ひ求むるが爲めに支拂ふ所の犧牲の中には、普通に云ふ饅頭の代價の外に、猶ほ種々の有形無形の犧牲を包含することを知るべし。

此の如く一定の貨物を獲得する爲めの犧牲は、必しも一定の貨物の提供のみに限るに非ず、又た一定の勞力の提供のみに限るに非ずして、貨物の提供と共に勞力の提供をも必要とし、又た貨物及び勞力の提供と共に名譽と云ふが如き無形のものゝ提供をも必要とするもの也。(空氣の獲得の場合には一切の犧牲を必要とせざること言を待たず)。固より學理研究の場合には、其の研究の便宜の爲めの前提として、一定の貨物の代價は必ず一定の貨物の提供のみより成り、又た一定の勞力の代價は必ず一定の貨物の提供のみより成ると假定することありと雖も、こは全く學問上の假定にして眞實世界の實相には非ず。

されば Bilimowitsch の如く Hierbei sind für die Volkswirtschaftslehre nur diejenigen Bedürfnisse von Interesse, deren Befriedigung mit *ökonomischen Opfern*, das heisst mit Aufwand von *wirtschaftlichen Gütern*, verbunden ist. (Zeitschrift für Volkswirtschaft, 20 Band, 4 Heft, S. 624.)と云ふは、一應は差支なきが如くなれども、而かも語弊あるを免れず。而して福田博士の近業『經濟學教科書』を見るに、此の尊敬すべき著書にも單に左の如く說明しあるに過ぎず。

『吾人の欲望の對象は常に欲望に比して不足なるものにして……此等の不足に打克つ爲め吾人は報償を提供するを要す。報償に宛てらゝるものは、一、吾人が有する外界の自然物、自然力、二、他人の勤勞、三、吾人自からの努力の之にして……此等一切の報償を總稱して費用と云ふ。』(一四、一五頁)。

余は此等の不足に打克つ爲めに提供するを要する犧牲には、玆に列擧されたる

ものゝ外猶ほ種々のものあることを得と考ふるもの也。此事は市場價格決定の理法を論ずる際に重大なる關係を有するものなれども、今は進みて是等の事に論及するを見合し置くべし。

只だ序なれば、一言此の犧牲と價値との關係を述べ置かんに、福田博士の前掲著書には左の如き説明あり。

『價値とは吾人の生活に於て欲望の對象に對し費用と利用とを比較して下す判斷を云ふ。利用なきものに對しては此判斷起らず、費用を要せずして取り用ひ得べきものに對しては此判斷必要ならず、此兩の場合は共に價値存することなきものとす。』（一六頁）。

價値と云ふ語を廣義に用ふれば、吾人は之が消費、保持、獲得の爲め何等の犧牲を必要とすることなき空氣に向つても多大の價値を認めつゝあるものなりと爲さざるを得ざるものにて、卽ち其點より云へば博士の此の一節の説明は少しく不用意の點あるを免れずと考ふれども、其等のことは凡て玆に省略し、只だ物の獲得の爲めに一定の犧牲を必要とする場合に其の獲得せんとする物に對して吾人の附

する所の價値のみに就いて云へば、恐らく此の如く説明し置きて差支なかるべし。而して經濟學上の研究對象たる價値は此の如き場合に生ずる價値に限らるゝものならん。されば此の意味に於いて空氣は經濟學上の價値を有せざるものと看做すを適當とせん。猶ほ是等の點に就いては進んで論ずべき事柄多しと雖も、原稿締切期日に迫りて既に餘力なきが故に、一先づ玆に筆を擱き、姑く篇に題して犧牲の研究と云ふ。（三月二十八日稿）

別篇『享樂遞減の法則と效用遞減の法則』を認め郵送し終へたる後、猶ほ原稿締切に若干の時日を剩す由承知したるを以て、更に此篇を起草せしと雖も、匆卒の間、意に滿たざる所甚だ多く、依然として編輯主幹及び讀者に負ふ所の罪の大なるを思ふ。